風姿花伝第五、

奥儀云

三　一座建立の寿福・衆人の愛敬

秘義云、「抑、芸能と者、諸人の心を和らげて、上下の感を成さん事、寿福増長の基、遐齢延年の法なるべし。究め〳〵ては、諸道悉に寿福延長ならん」となり。

〔口訳〕秘義に「一体芸能といふものは、諸人の心を和らげて、上下貴賤の者に感動をあたへることにあり、寿福を増長し遐齢延年の効を生ずる法といふ事が出来る。勿論、如何なる道に於ても、その道を究極まで究め尽すならば、それ等は悉く寿福増長のものとなるであらう」と述べられて居る。

殊更この芸、位を極めて、佳名を残事、是天下の許されなり。これ寿福増長なり。しかれども、殊に故実あり。上根上智の眼に見ゆる所、長位の究まりたる為手に於きては、相応至極

殊にこの能楽に於て、最上の芸位を極め、佳名を後世にまで残すといふ事は、天下の諸人に名人として許される事であり、天下に認められるといふことは又同時に、寿福増長であるわけである。しかし乍ら、ここに大切な故実工夫がある。芸の品格や位に於て究極まで達し得た為手が、上根上智ともいふべきすぐれた眼識者に認められるといふことは、芸と眼識とが、非常にうまく相応して居るのだから、演者の真価が十分に認められることは、勿論の事といひ得る。所が、大体より言つて、

なれば是非なし。凡、愚かなる輩、遠国田舎の賤しき眼には、この品位の上がれる風体、及びがたし。これを如何にすべき。この芸と者、衆人愛敬を以て、一座建立の寿福とせり。

愚な輩や遠国田舎の賤しい見物の眼には、この芸の品格高く位を究めた風体といふものは、とても認知し得られないものである。かうした場合に、演者は如何にすべきものであらうか。

此の（猿楽の）芸に於ては、衆人の愛敬を得る事を以て、その一座を立てて ゆく上の寿福として居るのである。

故、余り及ばぬ風体のみなれば、又諸人の褒美欠けたり。此の為、能に初心を忘れずして、時に応じ所によりて、愚かなる眼にも、実にも思ふ様に、能をせむ事、これ寿福也。よく〳〵この

それで、一般見物人の眼に及ばないやうな、あまりに高級な風体ばかりを演じては、一般諸人の褒美を得る事が出来ない。その為に、初心以来の年々去来の花を十分に身に持つて、時に応じ所に応じて、能を知らぬ者の眼にも、実にも面白いものよと感じるやうに能をする事が大切で、これ即ち寿福の基である。よくよくかやうな世態心理を考へて見ると、貴人の御前の能、宮寺の能から、遠国田舎の神社祭礼の猿楽に到るまで、何処で演じても、普く褒美せられるやうな為手を、寿福達

風俗を究め見るに、貴所、宮寺、田舎、遠国諸社の祭礼に至る迄、をしなべて譏りを得ざらんを、寿福達人の為手とは申べき哉。されば、如何なる上手なりとも、衆人愛敬欠けたる所

人の為手と言ふべきであらう。従つて、如何に上手な為手でも、衆人の愛敬に於て闕けた所があつたならば、その人は寿福増長の為手とは称し難い。かやうなわけであるから、亡父観阿は、どんな田舎や山里の片ほとりでの演能でも、其処の見物の気持を受け、其の所の風儀に最大の関心を払つて、芸をしたものであつた。

あらんをば、寿福増長の為手とは申難かし。然に、亡父は、如何なる田舎、山里の片辺にても、その心を受けて、所の風義を一大事にかけて、芸を為しなり。かやうに申せばとて、初心

かやうに言ふと、初心の為手には、

の人、それ程は何とて左右なく究むべきと、退屈の儀はあるべからす。此条々を心底に宛てゝ、その理を些と採りて、了見を以て、我分力に引き合わせて、工夫を致すべし。

そんな程度にまで究めるといふことは、自分等には到底出来ない事だと思つて、精進努力の気持を挫折してしまふ事があるかもしれないと思ふが、決して挫折退転してはならない。今述べた条々をよく心の中に納め、その道理を少しづつ採用し、いろいろ考案して、自分の力量相応な程度に工夫をこらして演出すべきである。

凡今の条々工夫は、初心の人よりは、なを上手に於きての、故実工夫なり。偶々得たる上手に成りたる為手も、身を憑み、名に化かされて、此故実無くて、徒に、名望よりは寿福欠けたる人

今まで述べて来た条々（奥儀篇の）の工夫は、初心の為手よりも、尚一段上位に立つ上手な為手に於いて必要な故実であり工夫である。世上には、たまたま上手といはれる芸位にまで進んだ為手でありながら、我が芸力を憑み、世上の名望に眩惑して、前に述べた故実工夫を闕き、その為に、徒らに名望の高いのに比して、寿福の乏しい為手が多いといふ状態であるから、誠に歎かはしく思ふ次第である。芸に於て得法した所があつても、この故実工夫が欠けてゐては全く駄目である。芸

多き故に、是を歎くなり。得たる所あれども、工夫無くては叶はず。得て工夫有らんは、花に種を添へたらんが如し。

仮令、天下に許されを得たる程の為手も、力無き因果

もすばらしく、その上に故実工夫を持つならば、恰も花に種を添へた如く、これこそ理想的といひ得る。

又、たとひ天下万人に上手名人と許される程の者でも、人為の力では如何ともし難い盛衰因果の理法のために、

にて、万一少し棄るゝ時分ありとも、田舎遠国の褒美の花失せずば、ふつとへ絶ふる事はあるべからず。道絶えずば、又天下の時に会ふ事あるべし。

万一その者の人気が落ちる時機に際会しても、田舎や遠国地方に於ける人々の賞玩を失ふことがなければ、その芸道がそのまま断絶してしまふといふ事は先づ有り得ない。断絶してしまふ事さへなければ、又再び時機が廻つて来て、天下衆人に賞玩せられる事があるであらう。

〔評〕

此の段に於ては「一座建立の寿福」といふことが、眼目として説かれてゐる。先づ秘義云として、芸能といふものは諸人和楽のものであり、上下の人々の感動を惹き起すもので、一面から見れば世上の人々の遐齢延年に役立つと共に、又能者自身の福利を増すものであるとのべて居る。この両方面の利益がなくては、芸能に順調な進歩はあり得ない。能者に福利のない芸は、断絶するより他に途がない。芸術家であるが故に、自己の利益を超越するといふのは高尚なやうだが、何となくそらぞらしい。その点からいふと、世阿弥の言葉は、足が大地に附いてゐる。

能役者の得る寿福について「位を究め、佳名を得、天下の許されを得る」といふ事を眼目として居る点は心すべきである。この境地に進めば、物質的な福利は自然に来るのである。しかし、天下に許され貴賤都鄙に普ねく褒美せられるといふ事は、単に芸の練磨で名人になつただけでは、必ずしも得られない。如何となれば、すべての見物人が皆「たけ・位」の上つた芸の妙味を理解し認めるといふ事は望めないからである。ここに「時に応じ、所によりて、愚かなる眼にも、げにもと思ふ様に能をする」といふ故実工夫が必要となつて来る。これはしかし、芸のレベルを低下して演ずるといふのではない。あまたの風体あまたの曲目

に通じて、対手の教養なり嗜好なりに向くやうなものをその中から選び出して、それを力一ぱいに演ずるのである。かくして衆人の愛敬を獲得する事が出来、それが同時に其の一座を成長発展せしめる寿福となる。この事実は、父観阿弥が身を以て実行し実証した所であつた。

次に、かやうな故実工夫を究めるまでの上達は、到底及び難いものだと初心者は思ふであらうが、そこで退転してはいけないといひ、自分の分際力量に適応する範囲内で、いささかでもこの工夫をこらして演出しなければならぬと励ましてゐる。しかし、元来かやうな故実工夫は、

上手といはれる人に於て特に必要なものだから、初心者の場合については「その理を些と取る」「我分力に引合せる」といふ条件つきで奨めてゐるのである。次にかく貴賤上下の両端に、普ねく眼を配つて、その何れにも褒美せられるといふ事が、時としては、一座を破滅の危運より救ふ事があるといふ一条は、誠に深謀遠慮といふべきであらう。世人の好尚は時としては浮雲の如く移り変り、保護者の愛顧も又一朝にして地を易へる事がある、現に世阿弥の晩年にはかかる不運がつづいた。その時、一時の命脈を田舎でつなぎ、機を得て再び都に帰り咲くがためには、どうしても田舎遠国を無視してはならないのである。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈　上巻』能勢朝次　著